

## 種の論争はパーフィットから何を学べるか

網谷祐一 (Yuichi Amitani) ・伊勢田哲治 (Tetsuji Iseda)

東京農業大学 ・ 京都大学

---

「ひとの同一性」(personal identity)にかんするデレク・パーフィットの還元主義的説明——ひとの同一性ではなく心理的關係が、脳分割の事例のような我々にとって重要な問いに答えるために重要である——の帰結については広く議論されてきた。これに対してひとと種の間並行關係についてはあまり注意が向けられてきたとは言えない。本発表では、パーフィットの説を「種」という概念に適用し、その帰結について考える。そうした帰結の一つは、種分化の研究において重要なのは、特定の個体群が(いつ)種になるのかではなくて、その背後にある因果的・歴史的プロセスを明らかにすることであるということである。

この目標のために、まず我々はひとの同一性に関して立てられたパーフィットの説を一般化する。ここで重要になるのが「いくらか不正確な要約レポート」(“a somewhat inaccurate summary report,” 以下 SISR) という概念である。これをパーフィットのひとの同一性の説に当てはめると、彼の主張の一部は「ひとについての二値的な表現(私はバラク・オバマであるかどうか)は、その背後にある心理的關係についての(程度を許す)表現の SISR である」と解釈できる。この解釈によれば、ひとについての表現は多くの状況を記述するのに有効であるものの、一方脳分割の事例のように、「ひと」の観点から事態を記述することが哲学的困難を招き、さらに「何が我々にとって大事なのか」を明らかにするのに役立たない場合も存在するのである。

次いでこの一般化されたパーフィット的還元主義を種に適用する。これによって、ひとの同一性と同様の状況が種についても生じている(とりわけ種分化の研究にとって)ことがわかる。この文脈で重要なのは、著名な進化生物学者であるジェリー・コイン&H・アレン・オアとガイ・ブッシュの間に関わられた二つの論争である。彼らは種分化研究にかかわる方法論的問題——種分化研究を始める前に種を定義すべきかという問題——について意見を異にするだけでなく、具体的な種分化の問題——米国のリンゴミバエ (*Rhagoletis pomonella*)

のホストレースが同所的種分化の過程にあるか——についても論争する。本発表ではこの二つの論争を取り上げ、第一の概念的・方法論的対立が第二の論争に対してほとんど影響を与えていないという事実から、種分化の研究者にとって重要なのは、ある個体群を種と呼ぶかどうかではなく、その背後にある種分化プロセスの因果的関係を理解することであると論じる。